

アヒラム碑文とアジタワッダ碑文

Phoenician Inscriptions : Ahiiram and Azitawadda

酒 井 龍 一

はじめに

本稿では、フェニキア語の「アヒラム碑文」(KAI 1・2)と「アジタワッダ碑文」(KAI A26 通称「カラテベ碑文」)を検討する。前者は、フェニキア世界の中核たるレバノンのゲブラ(ビブロス)、後者は外縁たるトルコのカラテベで出土した。手順は、先ずワープロによるフェニキア文字文で打ち出し、各単語に目安程度の英単語を付記しながら、簡単な解説を加える。全体の訳文は示さないが、Gibson(1982)・谷川(2001)を参照のこと。

字形による碑文の年代

事前に、字形と碑文年代との関係を紹介する。フェニキア文字の中で、顕著に時代的变化をするのは、「KAPH・MEM・QOPH」である(Szyncer1981:p.50・Gibson1982:pp.180-181)。その「前半期」に焦点を当てると、次のⅠ～Ⅳ類(第1図)に大別できる。

Ⅰ類 アヒラム碑文(第2図)に代表され、前11～10世紀頃の字形である。KAPHは、「三指形」を呈する。後世に見られる右側の軸線がない。MEMは、曲線的に、「横向きW頭」が斜め方向の軸線に取り付く。QOPHは、「円形頭」と縦方向の軸線が特徴である。

Ⅱ類 キラムワ碑文に代表され、前9～8世紀頃の字形である。KAPHは、「横向きV頭」が縦方向の軸線に取り付く。MEMは、直線的となり、「W頭と縦方向の軸線」が特徴。QOPHは、「楕円頭」で、次第に「頭の右半部がやや大きく」なる。

Ⅲ類 アジタワッダ碑文(第3図)に代表され、前8～7世紀頃の字体である。KAPHは、「逆L字頭」が縦方向の軸線に取り付く。MEMは、「湾曲線と縦線で頭」が構成され、右側の軸線に取り付く。QOPHは、「より扁平な楕円頭」となり、中央に軸線が通る。

Ⅳ類 概して、それ以降の字形である。KAPHには、「L字頭」が右側の軸線に取り付くものが登場する。MEMの変化は少ない。QOPHは、「斜め8の字形頭」となり、軸線も傾斜する。

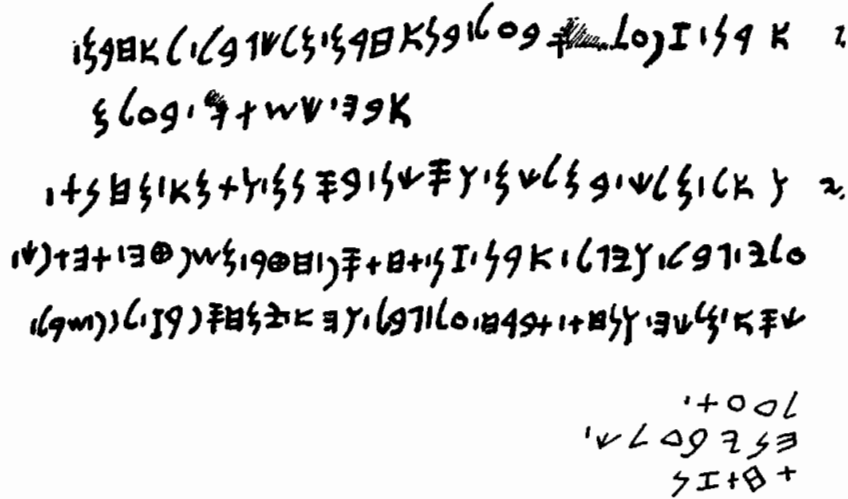
なお、アジタワッダ碑文頃から、概ね、「後半期」の自体となる。「後半期」における時代的変遷と地域性は、Peckman(1968)を参照のこと。極めて詳細な分析がある。

	I	II	III	IV
KAPH				
MEM				
QOPH				

第1図 KAPH・MEM・QOPHの類型
(Szyncer 1981に追加)

アヒラム石棺碑文

本碑文（第2図）は、1923年、ピエール・モンテがレバノンのビプロスで発見した石棺（ベイルート国立博物館）の蓋側面に、二行で刻まれている。石棺は前13世紀頃のものだが、前11～10世紀頃にアヒラム用に転用された。初期フェニキア語碑文の代表例として有名である。墓室に「graffito・落書き」もあり、後で検討する。



第2図 アヒラム碑文と落書き（出典 Kotsuji 1937）

1行目

	𐤀𐤆𐤁𐤌		𐤁𐤏𐤁𐤁	𐤏𐤓		𐤀𐤏𐤓		𐤏𐤓		𐤏𐤓	1
	Gebal		king of	AHIRAM		son of	[I]	TTBAAL		made that	Sarcoghagus

	𐤏𐤓		𐤏𐤓		𐤏𐤓		𐤏𐤓	𐤏𐤓
	eternity in		him placed	(he) when		his father	AHIRAM	for

本碑文には、単語分離記号「|」がある。「𐤏𐤓」は、名詞（女）で「sarcoghagus・石棺」。事実、碑文は石棺に刻まれている。

「-𐤏」は、関係代名詞「that」。指示代名詞「𐤏- this」と類似する。前者は接頭辞、後者は接尾辞。ここでは、「𐤏」が動詞「𐤀𐤏𐤓」の接頭辞なので、関係代名詞。関係代名詞には、接頭形「-𐤏」と独立形「𐤏𐤓」がある。「-𐤏」は古ビプロス方言。「𐤏𐤓」は、後のアジタワッタ碑文に登場する。ちなみに、パルミラ語は「𐤏𐤓」。ヘブライ語は「𐤏𐤓」である。

「𐤀𐤏𐤓・made」は、「𐤀𐤏𐤓」の3・男・単・完了形。主語は人名「𐤀𐤏𐤓𐤏𐤓・ITTBAAL」（男）。人名は、前置詞「𐤏𐤓・with」+神名「𐤀𐤏𐤓・BAAL」の構成で、「バアルと共に」の意味（Benz1972:p.223）。この石棺を設置した人物である。

ここまでは、「イットバアルが造った石棺」となる。続いて、「𐤏𐤓・son of」という表現で、イットバアルの系譜（父親名+身分）が記される。

「𐤁𐤏𐤁𐤁」は人名。英語表記では、「AHIRAM」と「AHIROM」の二者がある。通例、「アヒラム」と和訳され

る。イットバアルの父親で、石棺の被葬者。人名は、「**𐤁𐤏𐤍**・brother」 + 「**-𐤏**・my」(略) + 「**𐤏𐤓𐤏**・lofty」の構成で、「高貴な(私の)兄弟」の意味(Benz1972:p264)である。「**𐤏𐤓𐤏**」は、「king of・～の王」(合)。

「**𐤂𐤓𐤏**・Gebal・ゲバル」は、地中海東岸に位置したフェニキアの都市国家。「ビュプロス・*B u β λ ο ς*」は、そのギリシャ語名。ゲバルでは、今日、残存する碑文から、次の「6代の王」が判明している。アヒラムは最も先行する王である。

- 1 **𐤏𐤓𐤏𐤍** (AHIRAM アヒラム) 当石棺の被葬者 前11～10世紀
- 2 **𐤇𐤐𐤔𐤁𐤀𐤏** (ITTOBAAL イットバアル) 本石棺の設置者で、アヒラムの息子
- 3 **𐤏𐤓𐤏𐤍𐤇𐤏** (YEHIMELEK ヤヒメレク) イットバアルとの関係は不明
- 4 **𐤇𐤐𐤔𐤁𐤀𐤏** (ABIBAAL アビバアル) ヤヒメレクの息子?
シェションク像(治世・前935～914年)に碑文
- 5 **𐤇𐤐𐤔𐤁𐤀𐤏** (ELIBAAL エリバアル) アビバアルと兄弟
オソルコン1世像(前914～874年)に碑文
- 6 **𐤇𐤐𐤔𐤁𐤀𐤏𐤓𐤓𐤓𐤏** (SHIPITBAAL シビティバアル) エリバアルの息子

次は、「**𐤏𐤓𐤏𐤍**・AHIRAM + **𐤇**・for」の構成。「**𐤏𐤓𐤏𐤍**」は、「**𐤏**・his + **𐤓𐤏**・father」の構成。合わせて、「彼(イットバアル)の父アヒラムのために」。

「**𐤏** + **𐤓𐤏** + **𐤏**」。「**-𐤏**・when」は接続詞。「**𐤓𐤏**・put」は、動詞「**𐤓𐤏𐤓𐤏**」の3・男・単の完了形。「**𐤏**・him」は、直接目的語で、古ビュプロス方言。通例は「**-𐤏**」。「彼(イットバアル)が彼(アヒラム)を納めた時」。Krahmalkov (2001:p.70)は、「**𐤏** + **𐤓𐤏**」を「they placed him」(主語が複数)と英訳している。

続いて、「**𐤏𐤓𐤏**・eternity + **𐤓**・in」の構成。墓を「永遠の家」(例えば、パルミラ碑文では「**𐤏𐤓𐤏𐤓𐤏 𐤓𐤓𐤏**」)と呼ぶ場合も多い。

以上、1行目は、「イットバアルが造った石棺。ゲバルの王アヒラムの息子が、彼(私)の父アヒラムのため、(彼=私)が彼(アヒラム)を永遠(の家=墓)に納めた時に」。

2行目

𐤓𐤓𐤓𐤏𐤓𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏(𐤏)𐤓𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏	𐤇𐤏𐤓	2
army	a commander of and	governors in	a governor and	kings in	a king	if But	
𐤏𐤓𐤏𐤓𐤏𐤓𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤓𐤏𐤓𐤓𐤏	𐤓𐤓	𐤓𐤓𐤏	𐤇𐤏𐤓𐤏	𐤂𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏
his imperium	scepter of	shall break	this	sarcophagus	uncover he and	Gebal	invaded
𐤏𐤓𐤏	𐤂𐤓𐤏	𐤇𐤐	𐤓𐤓𐤓𐤏𐤓𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏𐤓𐤏	𐤏𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤓𐤏𐤓𐤓𐤏
he (if) And	Gebal	from	shall depart	peace and	his kingship	throne of	shall overturn
(・・・?)				𐤇𐤏𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤓𐤏𐤓𐤓𐤏	𐤓𐤓𐤓𐤏
				(𐤓)	(𐤏)		
				?	?	its inscription	shall erase

2行目は、盗掘者に対する警告文。「 $\text{לֹא}\cdot\text{if}+\text{בְּ}\cdot\text{but}$ 」の構成。「 $-\text{בְּ}$ 」は、通例、「and」だが、ここでは「but」のニュアンス。「 $\text{לֹא}\cdot\text{if}$ 」は、「禁止・否定」を意味する接続詞。合わせて、「But, (do not!) if~」といった感じ。接続詞「if」には、通例の「 וְאִם 」に加え、否定的な意味の「 לֹא 」がある。後者は、結果がそうあって欲しくない場合に用いられる。ちなみに、ヘブライ語の「 אַל 」は、禁止・否定の副詞。アラム語の「 לֹא 」も同様。条件文は、前提節と帰結節で構成される。

前提節。「 $\text{מִלְּכֵי מַלְכֵי מַלְכֵי}$ 」は、「a king in kings」。「 מִלְּכֵי 」は「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{king}$ 」の複数形。複数形(男)は、語尾に「 $-\text{י}$ 」を付加。「 $-\text{אִם}$ 」は前置詞「in」に相当する。

続く「 $\text{מִלְּכֵי מַלְכֵי מַלְכֵי}\cdot\text{governors(pl)}+\text{אִם}\cdot\text{in}\text{ מִלְּכֵי}\cdot\text{a governor}+\text{וְ}\cdot\text{and}$ 」は、「また諸長官の中の長官」の意味。石工の不注意により、「 $-\text{וְ}$ 」が抜けている。「 $\text{מִלְּכֵי מַלְכֵי מַלְכֵי}\cdot\text{army(f)}\text{ מִלְּכֵי מַלְכֵי}\cdot\text{commander of}+\text{וְ}\cdot\text{and}$ 」は、「また軍隊の司令官」。「 מַלְכֵי 」は、動詞「invade」の3・単・男・完了形。「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{Gabal}$ 」は前出。「 $\text{מַלְכֵי}+\text{וְ}\cdot\text{and}$ 」の「 מַלְכֵי 」は、動詞「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{uncover}\cdot\text{remove}$ 」の3・男・単・未完了形。未完了形には、主語を示す人称代名詞が語頭に付く。ここでは「 $-\text{הוּ}\cdot\text{he}$ 」(3・単・男)。「 מַלְכֵי 」は「石棺」(前出)。後に指示代名詞「 $\text{זֶה}\cdot\text{this}$ 」(男・単)がきている。

合わせて、「だが、もし諸王の中の(いかなる)王、また諸長官の中の(いかなる)長官、また軍隊の司令官がゲバルを侵略し、この石棺を暴いたら、」云々となる。

続いて帰結節。「 $\text{מַלְכֵי מַלְכֵי מַלְכֵי}$ 」は、「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{break}$ 」の自動詞的表現(Gt・Yipta'al態)。動作が自らに及ぶ表現で、「壊れるだろう」。接中辞の「 $-\text{נָ}$ 」(再帰形)がみられ、古ビブロス方言。語頭「 $-\text{נָ}$ 」は、未完了形に伴う人称接頭辞。既述の「ゲバルを攻撃し、墓を暴く者」を指す。「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{scepter of}\cdot\sim\text{の笏}$ 」(女・合)。「 $\text{הוּ}\cdot\text{his}+\text{מַלְכֵי}\cdot\text{imperium}\cdot\text{王権}$ 」。合わせて、「彼の王権の笏は壊れるだろう」といった意味である。

「 $\text{מַלְכֵי מַלְכֵי מַלְכֵי}$ 」は、「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{overturn}$ 」の自動詞的表現(Gt・Yipta'al)。「 $-\text{נָ}$ 」は、人称代名詞。「 $-\text{נָ}$ 」は再帰形。「 מַלְכֵי 」は「 $\text{throne of}\cdot\sim\text{の王座}$ 」(合)。「 $\text{הוּ}\cdot\text{his}+\text{מַלְכֵי}\cdot\text{kingship}$ 」は、「彼の王権」。即ち、「彼の王権の王座は崩壊するであろう」。通例、女性名詞の語尾は「 $-\text{נָ}$ 」。「 מַלְכֵי 」や「 מַלְכֵי 」など、それ以外の実例もある。

「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{peace}+\text{וְ}\cdot\text{and}$ 」。「 מַלְכֵי 」は、動詞「 $\text{מַלְכֵי}\cdot\text{depart}$ 」で3・女・単・未完了形。「 $-\text{נָ}$ 」は、人称代名詞。動詞の未完了形は、命令・願望・指示も表す。「 מַלְכֵי 」は、前置詞「from」。「 מַלְכֵי 」は「ゲバル」(前出)。

以上、「また、彼の王権の笏は壊れ、彼の王権の王座は崩壊し、平和はゲバルから逃げていくであろう」といった意味となる。この後の文言に関し、次のような問題点がある。

問題点1

まず、「 $\text{מַלְכֵי מַלְכֵי מַלְכֵי}\text{ מַלְכֵי מַלְכֵי}$ 」に関し、解説者の見解に差がある。即ち、A案(「碑文を消すならば」と、B案(「拭い去られん!」)である。相違点は、消されるべきは「碑文」なのか、「彼(墓を暴く者)」なのかという点にある。

A案例 (Krahmalkov2000:p.275) 「And if he shall ██████████ its [the coffin's] inscription,」

B案例 (Segert1976:p.139) 「 מַלְכֵי (jussive) "he may ██████████"」
(谷川2001:p.12) 「彼も拭い去られんことを」

「𐤆𐤀・he」は、人称代名詞（独）。「𐤀𐤁𐤏𐤍𐤅𐤏𐤍」は、本来は分離記号が入り、「𐤀𐤁𐤏𐤍 | 𐤅𐤏𐤍」と2語のはず。「𐤅𐤏𐤍」は、動詞「𐤅𐤏𐤍・erase」の男・3・単・未、かNip'al態で「消される」。

A案は、「𐤅𐤏𐤍」を、カル動詞の未完了と理解し、消される対象が「𐤀𐤁𐤏𐤍・その碑文」とみる。この時、文脈から、「-𐤏・and」の後に、否定・禁止の接続詞「𐤌𐤆・if」を補い、「そして、(するな!もし) 彼がその碑文を消すならば、～」と理解する。

B案は、「𐤅𐤏𐤍」を、カル動詞の受動態 (Nip'al)、3人称の未完了を指示形とみて、「𐤆𐤀・彼 (棺を暴く者)」が「払い去られん」ことを熱望する立場をとる。

問題点2

「𐤀𐤁𐤏𐤍」(2行目)を、各訳者は「𐤀𐤁𐤏𐤍」と改変している。「𐤀𐤁𐤏𐤍」(Harris1936:p.127, Segert1976:p.267)や (Gibson1982:p.14)。「s p r𐤀𐤁𐤏𐤍」(Hoftijzer and Jongeling 1955:p.799)。「𐤀𐤁𐤏𐤍」(谷川2001:p.12)。「𐤀-」では意味不明。人称代名詞の接尾辞「𐤀-・its」とすれば理解できるのが理由。「𐤀・its+𐤀𐤁𐤏𐤍=その碑文」。合わせて、「そして、(するな!もし) 彼がその碑文を消すならば、～」となる。

問題点3

「𐤌𐤁𐤏𐤍𐤏𐤍」(2行目)は、そのままでは意味不明。各者とも、手写文の「𐤌𐤁𐤏𐤍」を「𐤌𐤀𐤏𐤍」としている。

Hoftijzer and Jongeling (1995)は、「𐤏𐤍𐤏𐤍」を「with the sharp edge of」、即ち「𐤏𐤍𐤏𐤍・刃物の刃(合)+𐤌𐤀𐤏𐤍・with」(p.930)とみる。また、「𐤌𐤀𐤏𐤍」を、不明としながら、「some kind of erasing instrument・削り具の一種」と紹介している (p.1101)。この観点では、「もし彼(墓の盗掘者)がその碑文を、削り具の鋭い刃で消すならば、～」となり、意味はすっきりする。だが、後に、「～」に該当する文言が不可欠である(現時点では、その存在は未確認)。

Segertは、「An isolated example of a plural formed by reduplication is 𐤏𐤍𐤏𐤍 82.11.2"edge"」(1976:p.112p)、および「The form 𐤏𐤍𐤏𐤍 82.11.2 is explained as reduplicated pl.constr."edge"」(p.116)と解説している。「𐤏」は「口」。語彙集では、「𐤌𐤀𐤏𐤍」を「Pi. (?) to break」としている (p.302)。いずれにせよ、この見解では、まだ碑文は続くことになる。

対して、Krahmalkov (2000:p.262)は、下記のように、「𐤏𐤍𐤏𐤍」を、カル動詞の「REND・TEAR (from context)・引き裂く・破る」、また「𐤌𐤁𐤏𐤍」を、「his long trailing <royal> robe」(王服の一種)とみる。この観点だと碑文は完結するが、訳語の根拠が必要である。

And if he shall erase its inscription, his long trailing <royal> robe will tear [or be torn] .

杉(1992:51)は、「しかしとも彼(こ)の碑銘を抹消せば、彼の子孫は亡びん」と和訳。谷川(2001:p.12)は、「𐤌𐤁𐤏𐤍 | 𐤏𐤍𐤏𐤍」の訳文を「・・・」としている。また、F.Coulmas (1996:p.401)は、2行目の「𐤌𐤁𐤏𐤍」より以降は、空白のまま、転字をしていない。ただし「and he be eradicated」の英訳を示している。また、古代中近東の3000年史を詳説した(Kuhrt1995:p.404)は、次の訳を採用している。

And as for him, if he destroys this inscription, then the . . . !

落書 (A案)

墓室側壁に「落書」(第2図)がある。字体の類型は、アヒラム石棺と共通する(筆者別人)。解釈に若干、差が生じている。A案(災い)案とB案(汝の王)を解説する。

(A案-谷川例 2001:pp.12-13)

転写 | **𐤒𐤓𐤓𐤓** (3) | **𐤙𐤇𐤀𐤁𐤓𐤕𐤓** (2) | **𐤓𐤓𐤀𐤇** (1)

和訳(1~3)「告知。見よ、この下には汝に[]があるだろう。」

付記(2) y b d l kと読めるが、y p d l k (KAI)の間違いだろう。

(3) t h t z nは、「もしあなたがこれを壊せば」という訳も可能である。

(A案-Gibson例 1982:p.17)

英訳(1~3)「Beware ! Behold, there is [] for you down here.」

(A案-Robinson例 1995:p.165)

英訳(1~3)「Beware ! Behold [there is] [] for you down here.」

| **𐤓𐤓𐤀𐤇** 1
Know (Behold) !

| **𐤙𐤇** **𐤀𐤁𐤓** **𐤕𐤓** 2
(**𐤀𐤁𐤓**)
you for disaster here (Behold !)

𐤒𐤓𐤓𐤓 3
this bottom

1行目の「**𐤓𐤓𐤀𐤇**」は、「**𐤓𐤓**(動) + **𐤇**(前)」の構成。弱動詞「**𐤓𐤓**・知る」の連語不定詞形(Krahmalkov:p.202)。語頭に「**-𐤇**」が、語尾に「**-𐤓**」が付加されている(Segert:p.135)。「知ること・知識・告知」など、名詞的意味をもつ。文頭に用いられると、「知れ!」といった命令調表現にもなる。

2行目の「**𐤕𐤓**」は、場所を示す副詞「here」。別に、ヘブライ語の「**𐤅𐤓**・Behold !」(Brown・Driver・Briggs 1951:p.243)を参考にすれば、「**𐤕𐤓**」も「**𐤓𐤓𐤀𐤇**・知れ!」と同様の意味も想定できる。

「**𐤙𐤇𐤀𐤁𐤓**」は問題がある。谷川(2001:p.12)は、「y [] d l kと読めるが、y [] d l k (KAI)の間違いであろう」とみる。確かに、「**𐤀𐤁𐤓**」は意味不明である。そこで、「**𐤙𐤇𐤀𐤁𐤓**」に変更すると共に、その構成を「**𐤙𐤇** **𐤀𐤁𐤓**」とみる。「**𐤀𐤁𐤓**」を動詞と仮定すると、「**-𐤓**」は未完了形の接頭辞。その原形は「**𐤀𐤙𐤓**・悩む」となり、2行目は下記のような英訳となる(Hoftijzer and Jongeling 1996:pp.902-903)。

Behold you shall come to grief

別に、「**𐤙𐤌**・for you + **𐤀𐤆𐤏**・disaster + **𐤕𐤓**・Behold !」の構成で、「**𐤀𐤆𐤏**」を名詞とみることも可能。参考となるのは、ヘブライ語の名詞「**אִשָּׁר**・disaster・災い」(Brown・Driver and Briggs1951:p.810)である。これを根拠に、フェニキア語でも「**𐤀𐤆𐤏**・災い」を仮定すれば、文脈は明確となる。この場合、「**𐤀𐤆𐤏**」を「**𐤀𐤆𐤏**」の誤記だと強弁する必要がある。問題は残っている。

「**𐤙𐤌**」は、「**𐤙**・you + **𐤌**・for」の構成。3行目の「**𐤎𐤅𐤎**・下」は前置詞や名詞の機能。「**𐤕𐤓**・this」は指示代名詞(男・単)。3行目は問題ない。

落書 (B案)

B案(汝の王)を解説する。

| **𐤎𐤅𐤎** 1
Know (Behold) !

| **𐤙𐤌𐤀𐤆𐤏** **𐤕𐤓** 2
(O)
your king I am here

𐤕𐤓 **𐤎𐤅𐤎** 3
this bottom

1行目は「知れ！」でも「告知(する)！」でもよからう。間投詞の一種である。

2行目の「**𐤙𐤌𐤀𐤆𐤏** **𐤕𐤓**」は、「**𐤙𐤌** **𐤀𐤆𐤏** **𐤕𐤓**」の方が妥当ではないか。つまり、単語の区切りと、2語目の読みを変更する。

「**𐤕𐤓**」は、「**𐤕**+**𐤓**」の構成。「**𐤕**」を副詞「here」と理解し、「**𐤕-**」を人称代名詞(1・単)とみる。即ち、「**𐤕𐤓**」を、「here I am・私がここにいる」(Segertp.159)とみる。同時に、「**𐤙𐤌** **𐤀𐤆𐤏**」を「**𐤙𐤌** **𐤀𐤆𐤏**」に変更する理由を示す必要がある。

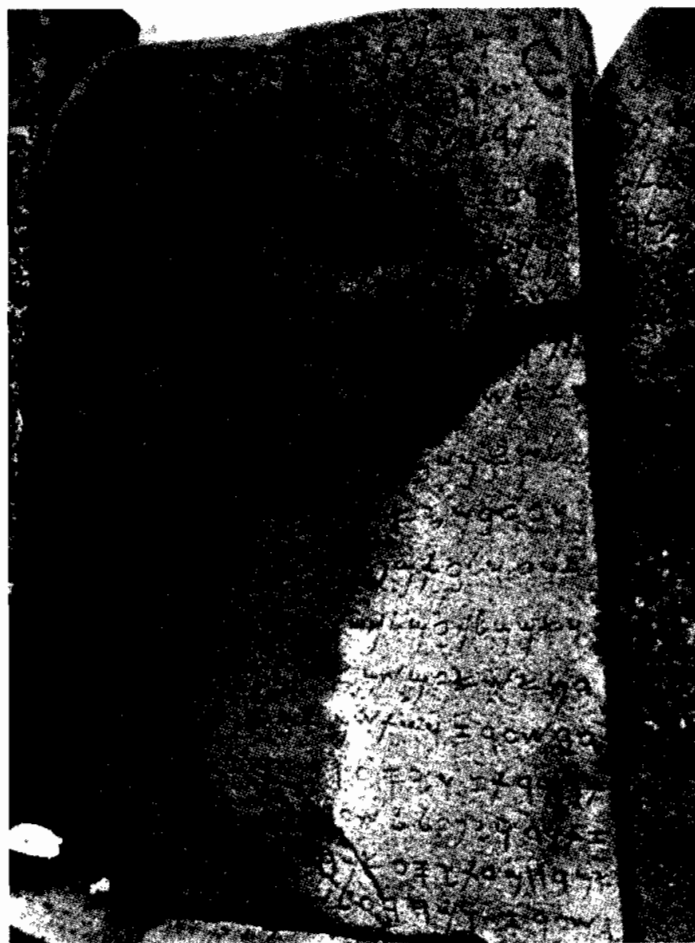
- ①前提として、「**𐤙𐤌𐤀𐤆𐤏**」の意味が不明である。
- ②次に、「**𐤀**」の字形が「**O**」に似ている。
- ③結果的に、変更によって、文意が明確になる。

1行目に、「**𐤀**」と「**O**」があり、2行目も「**𐤀**」と読める。これを書き手の誤りと仮定し、「**O**」に変更した場合、「**𐤙**・汝の + **𐤌𐤀𐤆𐤏**・王」となる。3行目に問題ない。総合すると、「知れ！私=汝の王がここにいる。この下！」と理解できる。Krahmalkov (2000:p.160)も、「Know : I, your king, am here, at the bottom of this <shaft>」と英訳している。とにかく、A・B案とも、碑文自体の再観察と検討が必要である。

以上、石棺碑文の書き手と、落書きの書き手による恐ろしい「呪い文」や強い「警告文」にもかかわらず、後日、墓も石棺も盗掘されてしまった。まことに不運なことである。といっても、アヒラム石棺自体、かつて誰かの石棺を転用したのである。



1



2

第3図

- 1 アジタワッタ碑文とボッサルト博士
- 2 アジタワッタ碑文の第IV欄
- 3 アジタワッタ碑文の第I欄

(出典 C.W.ツェーラム 1959)



ᠮᠢᠵᠤ ᠶᠤᠵᠤ ᠶ᠋ᠪᠵᠢ ᠮᠤᠵᠤᠯᠤ ᠰᠤᠵᠤ ᠮᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ ᠬᠣ᠎ᠠ ᠵᠤᠯᠣᠣ 3
 (n.a.) I vivified mother(o.c.)and father(o.c.) Danunians to Baal me made

「ᠵᠤᠯᠣᠣ」は、動詞(不・絶) + 人称代名詞(1・単・男) = 「ᠵ・me + ᠬᠣ᠎ᠠ・made」の構成。過去完了。主語は「ᠬᠣ᠎ᠠ・バアル(神)」。「バアルは私を～とした」。次は、「ᠮᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ・ダヌヌ人達 + ᠬ・to」の構成。「ダヌヌ人にとって」。「ᠮᠤᠵᠤᠯᠤ ᠰᠤᠵᠤ」のうち、「ᠰᠤᠵᠤ」は「父」、「ᠮᠤᠵᠤ」は「母」。共に、目的格補語マーク(o.c. - objective complement)の「-ᠬ」が付く。前置詞「-ᠬ」には様々な意味がある。先の「ᠮᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ + ᠬ」は「ダヌヌ人にとって」の意味。後は「to」でなく、「like・～のように」のニュアンス。「ᠰᠤᠵᠤ + ᠬ」は「父のように」、「ᠮᠤᠵᠤ + ᠬ」は「母のように」。合わせて、「バアル(神)が私をダヌヌ人達にとって父のようにまた母のようにした」。

「ᠶ᠋ᠪᠵᠢ」は、「ᠵᠤᠶ᠋ᠪᠵᠢ・生きる」の使役(Yip'il)態・不・絶・過去完了で「生きさせた・復興させた」。主語は「ᠶᠤᠵᠤ・私」。「ᠮᠢᠵᠤ」は「対格マーク」(n.a. - nota accusative)。次行頭に「ᠮᠤᠵᠤᠴᠤ・ダヌヌ人達」がくる。「私はダヌヌ人達を復興させた」。

ᠰᠤᠨ ᠵᠠᠷᠢᠮᠤᠵᠤᠯᠤ ᠵᠠᠳᠠᠨ ᠯᠠᠶᠤᠨ ᠲᠣᠷᠢᠳᠤ ᠶᠤᠵᠤ ᠰᠤᠪᠠᠶ᠋ᠵᠢ ᠮᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ 4
 sun rising since Adana Plain of territory of I extended Danunians
 (from East)

動詞 + 主語 + 目的語の語順。「ᠰᠤᠪᠠᠶ᠋ᠵᠢ・広げた」(不・絶・過完)は、「ᠰᠤᠪᠠᠶ᠋」の使役(Yip'il)態。主語は「ᠶᠤᠵᠤ・私」。以下は目的語。「ᠵᠠᠳᠠᠨ・～の領土」(合)。「ᠯᠠᠶᠤᠨ・～の平原(合) + ᠲᠣᠷᠢᠳᠤ・アダナ」は地名。当時、アダナを中心とする新ヒッタイト系の国家は、「アダナの平原」と呼ばれていた。合わせて、「アダナの平原の領土を広げた」。次に、その範囲が記される。

「ᠵᠠᠳᠠᠨ ᠲᠣᠷᠢᠳᠤ ᠰᠤᠪᠠᠶ᠋ᠵᠢ ᠵᠠᠳᠠᠨ」は、慣用語句「日の出(東)から、日の入り(西)まで」。「ᠵᠠᠳᠠᠨ」は、「ᠵᠠᠳᠠᠨ + ᠲᠣᠷᠢᠳᠤ + ᠬ」の構成。複合前置詞「ᠲᠣᠷᠢᠳᠤ・from + ᠬ・to」は、「since」の意味。「ᠵᠠᠳᠠᠨ」は、同じ綴りの動詞「ᠵᠠᠳᠠᠨ・到着する」の分詞。「ᠰᠤᠪᠠᠶ᠋ᠵᠢ・太陽」は、石碑に余白がなく、綴りの途中で次行に移っている。

ᠲᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ ᠮᠣᠨ ᠬᠤ ᠵᠠᠮᠤᠵᠢᠰᠢ ᠵᠤᠶᠤ ᠵᠠᠳᠠᠨ ᠲᠣᠷᠢᠳᠤ ᠰᠤᠪᠠᠶ᠋ᠵᠢ 5
 Danunians to prosperity all my days in were And it's setting until to and
 (to West)

「-ᠶ・and」。「ᠲᠣ」は、前置詞「until to」。「ᠵᠠᠳᠠᠨ・入口」には、「太陽の」を指す代名詞「ᠵ・it's」(3・単・男)が付いている。

「ᠵᠤᠶ᠋ + ᠶ・And」の構成。「ᠵᠤᠶ᠋ = Be動詞」は、3・単・男の完了形。「ᠵ・my + ᠮᠤᠵᠢ・days + ᠰ・in」の構成。「ᠮᠤᠵᠢ」は、「ᠮᠤᠵᠢ・日」の複数形。「ᠵ・my」は所有人称代名詞。合わせて、「また私の日々には～があった」。

「ᠬᠤ・all」は形容詞。ここで石碑が欠損しており、そこを避けて次の単語が刻まれている。「ᠮᠣᠨ」は「繁栄・喜び」。「ᠮᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ・ダヌヌ人達 + ᠬ・for」の構成。「ᠮᠤᠵᠤᠵᠤᠯᠤ」の「ᠮ」は、余白の都合で、6行目の頭にくる。6行目と合わせ、「また私の日々(時代)にはあらゆる繁栄がダヌヌ人達にあった、また豊作と旨いもの(があった)」。

074 907 מאפו יצא &למל מוקמל 09W מ 6
 acquired and Paar storehouses of I filled And dainty and plenty and

「09W」は「豊作」。「מוקמל」は「旨いもの」といったようなニュアンス。この部分を、杉は「しかしてわが御代はダヌン人にとってはすべて健康（幸福）、富裕にして安寧（自由独立）なりき」（1992:p.51）と文語調に、谷川は「私の日々にはあった、あらゆる良い物がダヌン人に、また豊かさと美味なる物が」と語順に合わせ和訳している（2001:p.26）。このような表現は、以降、よく登場する。

「-4・And」。「&למל・満たした」は、Pi'el態（強意・能動）の不・絶・過去完了。主語は「יצא・私」。目的語は「907 מאפו・パアルの倉庫群（複・合）。ここで碑石が欠損しており、そこを避けて次の単語が刻まれている。「907・パアル」は、王アフリクの住むクエの首都。合わせて、「また私はパアルの倉庫を満たした」。

「-4・そして」。動詞「ל07・得た」（不・絶・過完）。その主語「יצא・私」は次行の頭にきている。合わせて、「そして私は～を得た」。

0 6מבמל קלמ 0 קלמל ממ 0 ממ יצא 0 7
 upon army and shield upon shield and horse upon horse I

何を得たのか。「0・upon」の前後に「ממ・馬」の単語があり、即ち、「馬の上に馬」。「קלמ 0 קלמל」は「盾の上に盾」。「קלמ・盾」。「6מבמל 0 6מבמל」は、「軍隊の上に軍隊」。「6מבמל・軍隊」は女性名詞。最後の単語は、碑石が欠けているので、それを避けて刻まれている。6行目末と合わせて、「また私は馬の上に馬を、盾の上に盾を、軍隊の上に軍隊を得た」となる。

מללמ מא9W מללל 09 999 6מבמ 8
 detractors destroyed And gods and Baal because of army

「6מבמ・軍隊」（女）。「999+9」は、複合前置詞「because of・～のために」。「09・パアル」は神名。この後は「מללל・神々+4・～と」。合わせて、「パアル（神）と神々のために」となる。

「מ9W」は、動詞の完了形「9W・粉碎した」に、主語となる人称代名詞の接尾辞「מ・私が」が付いたもの。「私が粉碎した」。目的語は「מללל・あざける者達」。この単語は、動詞「לל・あざけた」（Yip'il態「לל」4→2）の分詞形（接頭のמ）で、複数形（接尾のל）である。合わせて、「私はあざける者達を粉碎した」。

יצא &ק02ל 39&9 לז W& 099 0ז יצא 99מל 9
 I built And land in were who evil the all I removed and

「-4・and」。動詞「99מ」（未・絶）は「追い払った」。主語は「יצא・私」。目的語は「099 0ז・すべての悪魔を」。「-9」は、定冠詞「the」。「39&9 לז W&」は「国にいたところの」。「W&」は関係代名詞。「לז」は「לזW≡Be動詞」の3・単・男の完了形。「39&9・国+9・in」は「国の中に」。合わせて、「そして国の中にいたすべての悪魔を追い払った」となる。

「-4・And」。「&ק02ל・建てた」は、「&ק0」のYip'il態・不・絶・過去完了。主語は「יצא・私」。目的

語は、次行にある。

ᠮᠣᠸᠤ ᠵᠢᠶ᠋ᠠᠬᠤ ᠠᠠᠠᠠᠨ ᠶᠤᠶᠤᠬᠤ ᠬᠣᠷᠢ ᠮᠣᠸᠤᠨ ᠵᠢᠶ᠋ᠠᠬᠤ ᠮᠤ 10
good things my lord's family of for I made and fortune in my lord house of

「ᠮᠤ」は「～の家」。「ᠵᠢ・私の+ᠶ᠋ᠠᠬᠤ・主人」(合)。「ᠮᠣᠸᠤ・繁栄+ᠠᠠᠠᠠᠨ・in」。前行末と合わせ、「また私は私の主人の家を繁栄の中に建てた」。

「-ᠶ᠋ᠠᠨ・And」。「ᠬᠣᠷᠢ・～をした」は動詞。目的語は「ᠮᠣᠸᠤ・善きこと」。「ᠵᠢ・my+ᠶ᠋ᠠᠬᠤ・lord+ᠠᠠᠠᠠᠨ・family of+ᠬᠣᠷᠢ・for」の構成は、「私の主人の家族のため」。合わせて、「そして私は私の主人の家族のため善きことをした」。

ᠮᠤ ᠶᠣᠯᠠᠮ ᠶᠤᠶᠤᠬᠤ ᠮᠤᠠᠨ ᠵᠠᠬᠤ ᠬᠤᠭᠢᠮᠤ ᠬᠣ ᠶᠤᠶᠤᠬᠤ ᠠᠠᠠᠠᠨ 11
with peace I established And his father throne of upon I settled And

「ᠠᠠᠠᠠᠨ・座らせた」(不・絶・完)は、Yip'il・使役能動態。誰を座らせたのか、人物はないが、幼少時代のアワリク。場所は「ᠵᠢ・his+ᠠᠬᠤ・父+ᠬᠤᠭᠢᠮᠤ・の王座+ᠬᠣᠷᠢ・upon=彼の父の王座に」。合わせて、「そして私は彼(アワリク)の父の王座に(アワリク)を座らせた」。

「ᠮᠤᠠᠨ・置いた」(文意は「確立した」)は、「ᠮᠤᠠᠨ」の3・単・男・完。主語は「ᠶᠤᠶᠤᠬᠤ・私」。目的語は「ᠶᠣᠯᠠᠮ・平和」。「ᠮᠤᠠᠨ・with」。次行頭を合わせ、「また私は平和をあらゆる王と確立した」となる。

-ᠶ᠋ ᠵᠠᠠᠠᠨ ᠶᠣᠯᠠᠮ ᠬᠤ ᠵᠣᠬᠣᠷ ᠮᠤᠠᠨ ᠷᠬᠤ ᠶᠣᠯᠠᠮ ᠬᠤ 12
and my justness by king every me put fathers in also And king every

前行の続きで、「ᠬᠤᠷᠢ・every・all+ᠶᠣᠯᠠᠮ・王」。

「ᠷᠬᠤ・also」は接続詞。「-ᠶ᠋ᠠᠨ・And」が付く。「ᠮᠤᠠᠨ」は、「ᠠᠬᠤ・父」の複数形。男性名詞の複数語尾は、通例、「-ᠮᠤ」だが、女性名詞の語尾と同様「ᠮᠤ-」例もある。「ᠠᠠᠠᠠᠨ・in」が付く。「父達の中に」。前出の動詞「ᠬᠣᠷᠢ」は、ここでは「置いた」。目的語の人称代名詞「ᠮᠤᠠᠨ・me」が付く。主語は、「ᠶᠣᠯᠠᠮ ᠬᠤᠷᠢ・あらゆる王」。合わせて、「あらゆる王は父達の中に私を置いた」。「父達」は、「王の取り巻き達」の意味であろう。

以下、理由が記される。「ᠵᠠᠠᠠᠨ・正義」。「-ᠠᠠᠠᠠᠨ」は、「in」や「by」の意味があり、ここでは後者。「ᠵᠢ-ᠠᠠᠠᠠᠨ・my」。「-ᠶ᠋ᠠᠨ・and」の後は次行となる。

ᠣ ᠮᠤᠵᠢᠮᠤ ᠶᠤᠶᠤᠬᠤ ᠵᠠᠨ ᠵᠠᠬᠤ ᠮᠣᠸᠤᠨ ᠵᠠᠠᠠᠠᠨ 13
fortress I built And my heart excellence of by and my wisdom by

「ᠵᠢ・my+ᠮᠤᠵᠢᠮᠤ・思慮(女)」。「ᠮᠣᠸᠤᠨ」は「～の美德」(合)。後の「ᠵᠢ・my+ᠠᠬᠤᠨ・心」と繋がる。合わせて、「私の正義と私の思慮と私の心の美德によって」。

「-ᠶ᠋ᠠᠨ・and」。「ᠵᠠᠠᠠᠠᠨ・建てた」は、動詞「ᠵᠠᠠᠠᠠᠨ」の不定詞・絶対形。過去完了を表す迂言用法(past perfective periphrastic)や接続法(subjunctive)は、Charles and Krahmalkov(2001:pp.211-212 and p.206-207)を参照のこと。主語は「ᠶᠤᠶᠤᠬᠤ・私」。目的語は「ᠮᠤᠵᠢᠮᠤᠨ・城壁(女)。次行にまたがる「ᠮᠤᠶᠣᠨ」は、「ᠶᠣᠶᠤᠬᠤ・強い(女)」。

の複数形。合わせて、「また私は強固な城壁を造った」。

ኃሃ ሠጸ፩ ሃሃዋሃ፩ ሠሪ፩ ራዐ ጠጊዮዋ ራሃ፩ ጠ፤ 14
were where in places in borders upon outlines all in

その場所が記される「ራሃ・all+፩・in」の構成。「ጠጊዮዋ」は、「ጊዮዋ・辺境」の複数形。「ሠሪ፩」は、「ሪ፩・国境」(男)の複数形。接頭辞「-፩・in」が付く。「ሃሃዋሃ፩」は「ሃዋሃ・場所」の複数形。接頭辞「-፩・in」が付く。「あらゆる国境の外縁に」。続いて、場所の説明がされる。

「ሠጸ፩・関代・where+፩・in」で、「～の場所に」。「ኃሃ」(≒Be動詞 3・単・男・完)。主語は、次行の頭にある。

ፈፅዐ ሠጸ ራ፩ ሠጸ ሃፈፈገጸ ራዐ፩ ሃዐ፩ ሃሃጸ 15
subject who (neg.) who bandits chief of bad men

「ሃሃጸ・men」は、「ሠጸ・man」の複数形。「ሠጸ」は関係代名詞。「ሃዐ፩」は、「ዐ፩・悪い」の複数形。「ራዐ፩・～の首領」は合形成。「ሃፈፈገጸ」は、「ፈፈገጸ・盗賊」(男)の複数形。合わせて、「悪人達：盗賊達の首領がいた」場所。「ሠጸ」は関代。「ራ፩」は否定辞(negation)。「ፈፅዐ」は、名詞で「服従者」(男)。

ሃዐገ ጠ፩ጠ ሃኃጠጠ ፈሃጠ፤ጸ ሃኃጸሃ ሠገሃ ጠ፩፫ ኃሃ 16
foot under set Azitawadda I And Mops house of were

「ኃሃ」は、「√ኃሃሃ≒B動詞」の3・複・男・過完。「ሠገሃ・Mops+ጠ፩፫・house of」は「モボスの家」。所属を表す接頭辞「-፫・of」が付く。「モボスの家の服従者」。「モボス(Mops)の家」とは、国王やアジタワッタの家系。前行と合わせると、「モボスの家の服従者でなかった者」。13～16行目は、「また私は、悪人達：盗賊の首領達：モボスの家の服従者でなかった者がいたあらゆる国境の外縁に強固な城壁を造った」。

「ሃኃጸሃ・私は+ሃ・and」。「ፈሃጠ፤ጸ・アジタワッタ」。「ሃኃጠ፩፩」は、動詞「ጠ፩・置く」に、人称代名詞(3・複・男・対)「ሃኃ・them」が付いたもの。「彼らを置いた」。「ጠ፩፩」は、前置詞「～の下」。「ሃዐገ」は、女性名詞で「足」。次行の頭に続くが、接尾辞に「፩・my」が付く。合わせて、「そして私アジタワッタは彼らを私の足の下に置いた」。「足の下に置く」は「征服した」を意味する慣用語句。

ኃኃፈ ሃኃጠ፩፩ ጠሃ፩ ሃሃዋሃ፩ ጠጊሃ፩ ሃኃጸ ኃ፩ሃ ፩ 17
Danunians them settle may those places in fortress I built And my

「ኃ፩ሃ・建てた」は、「፩ሃ፩」の不定詞・絶対形。主語は「ሃኃጸ・私」。目的語は「ጠጊሃ፩・城壁」。「ሃሃዋሃ፩・場所(pl)+፩・in」の後に、指示代名詞の複数形「ጠሃ፩・those」。合わせて、「そして私は城壁をそれらの場所に建てた」。

「ሃኃጠ፩፩」は、「ሃኃ(人称代名詞)+ጠ፩፩(動詞)+፫(接頭辞)」の構成。「፩ሃ፩・住む」に、連語不定詞を構成する「-፫・may」と、人称代名詞「ሃኃ・them」(3・複)が付く。「彼らが住めるように」。不定詞を用いた接続法(叙想法)は、Charles and Krahmalkov(2001:pp.206-207 a)を参照のこと。接続法(叙想法)

とは、「話し手が叙述内容を心の中で考えたこと（想念）を述べる法」（田中編 1988:p.645）。

次行前半と合わせ、「彼らダヌヌ人達が、彼らの心の平和の中に住めるように」。「マツク・ダヌヌ人達」は前出。

マツク メIO マラ& ヤク& ソY マク& マバ& マツ 18
entrance of in strong lands I defeated And their heart peace of in

「マバ」は女性名詞で「～の平和」（合）。前置詞「-&・in」が付く。後の「マク・彼らの+&・心」と合わせて、「彼らの心の平和の中で」の意味。

「-Y・and」に続く「ソ・征服した」（不・絶）は、動詞「マク」のPi'eI態。主語は「ヤク&・私」。目的語の「マラ&・国々」は、「ラ&・土地・国」（女）の複数形。「メIO」は、「IO・強い」の複数形。「ママ+&」は、「太陽+の入口（合）」。つまり「西方」。「-&・in」が付く。「そして私は西方の強い国々を征服した」。

マY マツク マY マ& ママ& マY ソ マ& マ& ママ 19
But predecessor were who kings the all defeated (neg.) which sun

次に、「以前いた王達が征服できなかった所の西方において」と説明される。

「マ&」は否定（negation）の小辞。後の動詞を否定。「ソ・征服した」は、動詞「マク」の3・単・男の完了形。「ママ&・王達+&・the+&・all」の構成で、「すべての王達」。定冠詞「-&・the」が付く。関係代名詞「マ&・who」。「マY≡Be動詞」。「マツク」は、「前任者・祖先」などを意味するが、ここでは「以前にいた王達」。

最後の単語は、次行にまたがる。「ヤク&・私は+Y・But」。この「-Y」は、次行との文脈から、「And」よりも、「But」のニュアンス。

ヤク& ママ& マク& ママ& ママ& ママ& マ 20
I them resettled I them deported them defeated Azitawadda I

人名「ママ&・アジタワッタ」。「ヤク&・私」。合わせて、「私アジタワッタは」といった強調形。「マク・征服した」は、「マク」の1・単。弱動詞の3子音目が消え、主語の「マ・I」と、目的語の「マ・them」（3・複）の接尾辞が付いている。

「ママ&・移送した」（不・絶）は、yiph'il態（使役能動）で、人称代名詞「マ・them」の接尾辞が付く。征服した土地の住人達を強制的に移動させた。

「ママ&」は、カル動詞「ママ&・住ませた」（yiph'il態・不・絶）に、人称代名詞「マ・them」が付く。次行に、住ませた場所が記される。

ママ& ママ& ママ& ママ& ママ& 21
Danunians and sun exit of in my border edge of in

「メヅ」(女・合)は「～の外縁地域」。接頭辞「△・in」が付く。「△△△・国境」には、「ヅ・my」が付く。「WYW・太陽+△△△・の出口(合)」は、「東」の意味。前行末と合わせて、「私は、彼らを太陽の出口(東)にある私の国境の外縁地域に住ませた」となる。即ち、征服した西方の人々を、領土の東側外縁へ強制移動した。

最後の「ヅヅヅ」は「ダヌヌ人達」。接頭辞「-△・and」が付く。この部分は、次の石碑の1行目へと続く。

第Ⅱ欄

△△△ ヅメヅ△ △△△ W △△△ 1
all in my days in were And there I resettled

まず、「△+△△△」の構成。「△△△」は、「住ませた」(過完)。「△・I」は主語。目的語は、前欄末尾の「ヅヅヅ・ダヌヌ人達」。「W」は、副詞「そこへ」。合わせて、「私は、ダヌヌ人達をそこへ住ませた(移住させた)」。

「△≒Be」。 「ヅ・my+△△△・days+△・in」は、「私の日々(時代)には」。

WYW △△△△ △△△ △△△ △△△ 2
sun rising since Adana valley of border of

「△△△・～の国境」は前出。「△△△・アダナ+△△△・の平原」は前出。前行末と合わせて、「アダナの平原のすべての国境に」。

「△△△△」(前出)は、「△△△+△+△」の構成。複合前置詞の「△・from+△・to」で、「since・～以来」に相当する。「-△」は、本来は「△△・from」。「△△△」は、動詞「△△△・出た」の分詞。「WYW・太陽」は前出。

△△ W△ △△△△△ △△△△ △△△ 3
were where places in And it's setting until to and

「△△+△」は、「そして～まで」。「△△△△」は、「△・its(代・3・単・女)+△△△・入り口」で、「その(太陽の)入り口=西方」。

「△△△△△」は、「△△△△・places+△・in+△・And」の構成。「また諸地域において」。「W△」は関係代名詞。「△△≒Be動詞」(前出)。

△△△△ △△△ △△△△ W△ △△△△△ △△△△ 4
walk to man feared where were feared before

「△△△△」は副詞「before」。「△△△△△」は、「△△△・恐れる」のNip'al(受動)態の分詞(継続状態を示す)で、「恐れられた」。Nip'al態は、語頭に「-△」が付く。語尾の「△-」は男・複。前行と合わせ、「そして、かつて恐れられた諸地域に」。

次に、その場所が説明される。「W△」は関係代名詞。「△△△△」は、「△△△」の未完了形(3・男・単)。語

の見解がある。通例、「𐤆𐤀𐤁」は後者である。

「h d 喜ぶ」(谷川2001:p.157 訳文 (p.27) は「歩いていた」)

「𐤀𐤃𐤍 to enjoy(?)/ to walk(?)」(Segert 1976:p.299)

「h d y to rejoice」(Hoftijzer and Jongeling:1995:p.349)

𐤍𐤏𐤍𐤏	𐤏𐤀	𐤀𐤁𐤀	𐤍𐤏𐤏	𐤏𐤀 𐤆
Gods and	Ba'al	because of	spindles	with
			(bodyguards)	(without)

⑤ 前置詞「𐤏𐤀」の訳語に、通例の「with」案と、異例の「without」案がある。Segert (1976:p.213) は「with」、Krahmalkov (2001:p.240) は「without」と英訳する。一般的には「with」の意味。⑥如何では、「without」とせざるをえない場合もある。

⑥ 「𐤍𐤏𐤏」は、「𐤍𐤏𐤏・錘(つむ)」(複)案とは別に、「護衛」案もある。「錘」案は、ヘブライ語の「𐤏𐤏𐤏・錘」を、「護衛」説は、ギリシャ語「φύλαξ・監視する者」(古川1989p.1183を参照)に依拠。「護衛」案は、Krahmalkov (2000:p.396)も採用している。「護衛」案なら、⑥は「without」とせざるを得ない。

「𐤏𐤏𐤏 spindle」(Segert 1976:p.299)

「P L K n.m. BODYGUARD」(Krahmalkov2000:p.86)

⑦ 「𐤆𐤀𐤁 𐤏𐤏𐤏」でなく、「𐤆𐤀𐤁𐤏 𐤏𐤏𐤏」とみる立場もある(Gibson1982:p.49)。ここでは「𐤏𐤏𐤏」を、動詞「𐤍𐤏𐤏・歩く」の女・未完了の变形とみる (p.59)。

⑧ Gibsonは、「𐤆𐤀𐤁𐤏」を「alone」と英訳。理由を、「𐤀𐤃𐤍 '(I) alone' on a recently published fragmentary inscr. from Byblos」と記している (p.59)

この見解は、英訳例のように、Krahmalkov (2000:p.254)も同様。「LHD (L + HD) [Syr. lhod] adv. ALONE, with person indicated by suffix pronouns」と明記している。重ねて(2001:p.260)でも解説しており、参照されたし。

なお、「𐤆𐤀𐤁𐤏・alone」は、「𐤆 (人称代名詞) + 𐤀𐤁 (数詞・1) + 𐤏 (前置詞)」の構成 (Hoftijzer and Jongeling:1995p.32)。「𐤀𐤁」は、本来、数詞「𐤀𐤁𐤏・1」。

この後の文言に問題はない。「𐤀𐤁𐤀 + 𐤀」(前出)は、「～のために」。「～」に該当するのは、「𐤍𐤏𐤏・神々 + 𐤏・and + 𐤏𐤀・バアル(神)」である。

𐤏𐤀𐤍𐤏	𐤍𐤏𐤏𐤍	𐤀𐤁𐤍	𐤆𐤏𐤏𐤏	𐤏𐤏𐤏	𐤏𐤏𐤏	7
dwelling and	daintity and	plenty	my days	all in	were	And

「そして私のすべての日々には～があった」。「～」とは、「𐤀𐤁𐤍・豊作」。「𐤍𐤏𐤏𐤍・美味なるもの」。更に、

次行にかけて、「𐤆𐤓𐤕・快適な+𐤍𐤁𐤍・住まい」。なお、「𐤍𐤁𐤍」は、弱動詞「𐤁𐤍𐤗・座る・住む」から派生した不定詞（名詞）。語頭の「-𐤗」が消え、語尾に「𐤍-」が付く。

-𐤆𐤓𐤕 𐤒𐤏𐤒𐤕 𐤕𐤗𐤕𐤕𐤁𐤒 𐤁𐤒 𐤍𐤁𐤕𐤕 𐤍𐤕𐤓𐤕 8
valley of all to and Danunians to mind peace of and goodness

加えて、「𐤁𐤒・心+𐤍𐤁𐤕・～の平和」、即ち「心の平和」があった。

「𐤕𐤗𐤕𐤕𐤁 (pl.) +𐤒 (前)」は、「ダヌヌ人達に対して（とって）」。次は、「𐤒𐤏・all+𐤒・to+𐤕・and」の構成。次行頭にかけての、「𐤕𐤁𐤕 𐤐𐤕𐤓𐤕・アダナの平原」は前出。合わせて、「またアダナの平原のすべてにとって」。

7～9行目にかけて、合わせると、「そして、私のすべての日々にはあった、豊作と美味なるものと快適な住まいと心の平和が、ダヌヌ人達とアダナの平原のすべてにとって」。

𐤍𐤕𐤕 𐤀𐤍𐤁𐤐𐤓 𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤁𐤕 𐤕𐤁𐤕 𐤐 9
put and my city the I built and Adana

「𐤕𐤁+𐤕・and」。「𐤕𐤁」は、「𐤗𐤕𐤁・建てる」の不・絶・過完。主語は、「𐤕𐤕𐤕・私」。目的語は、「𐤀・my +𐤍𐤁𐤐・町+𐤓・the=私の町」。

「𐤍𐤕+𐤕・and」。「𐤍𐤕・置いた」は、「𐤍𐤗𐤍」の不定詞・絶対形。主語は、次行頭の「𐤕𐤕𐤕・私」。

𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤒𐤓𐤁 𐤕 𐤗𐤁𐤕𐤍𐤀𐤕 𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕𐤕 10
Rasap and Ba'al Because Azitawaddi it's name I

対格は「𐤕𐤕𐤕・名前」。語尾「𐤕-」は「ma-」。代名詞の「a音」（3・単・女）が付加され、「その名前を」（Krahmalkov2001:p.53）。「𐤗𐤁𐤕𐤍𐤀𐤕・アジタワッディ」。前行末と合わせ、「私とその名前をアジタワッディと付けた」。

「𐤕」は、接続詞で「なぜなら」。次行と合わせ、「なぜなら、バアルと牡山羊達のラシェブ（神）が私を（その町を）建てるために派遣したから」。

「𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤒𐤓𐤁」は、「バアル（神）とラシャブ（神）」。次行頭や12行目からみて、後者は「牡山羊達のラシャブ（神）」と呼ばれていたらしい。

-𐤁 𐤕𐤕𐤕 𐤗𐤕𐤕𐤕 𐤍𐤕𐤕𐤒 𐤕𐤁𐤒𐤕𐤕 𐤕𐤁𐤕𐤕 11
I it built And build to me send of he-goats

「𐤕𐤕𐤕」は、通例、「鳥の一種」（Segert1976:p.300・Krahmalkov2000:p.420）と理解されるが、ここではヘブライ語「𐤁𐤓𐤓𐤕・牡山羊」（Brown・Driver・Briggs1951:p.862）に依拠し、「牡山羊」とみる。語尾「𐤕-」は複数形。ラシャブ（神）にかかる。

「𐤁𐤒𐤕𐤕」は、動詞「派遣した」。語尾に「𐤕-・me」が付く。連語不定詞「𐤍・it+𐤕𐤕・build+𐤒・to」は、「それを建てるために」。

「2・it+79・built+4・and」の構成。不定詞・絶対形で、過去完了。語尾の「it」は、「アジタワッダの町」を指す。主語は「797&・私」。末尾の単語は、次行に続く。

-9 797& 7WA 9909Y 709 990 12
with he-goats Rasap of because of and Baal because of

前出の単語ばかり。「9909・～のため」。「709・バアル（神）」。「797& 7WA・牡山羊達のラシャブ神」。「バアル神のため、また牡山羊達のラシャブ神のため」。再び、「-9」は次行の頭に続く。

797&Y 7707 79W9Y 70779Y 09W 13
peace of in and good dwelling in and welfare in and plenty

「09W・豊作」、「70777・美味なるもの」、「7707 79W・快適な住まい」、「97 797・心の平和（いずれも前出）の各語に、前置詞「-9・with」が付く。「豊穡と共に、美味なるものと共に、快適な住まいと共に、そして心の平和と共に」、アジタワッダの町を、バアル神と牡山羊達のラシャブ神のため建設した。

-97Y 79& 7707 9777 7797 97 14
house of for and Adana Valley of for guard be to heart

「7797（動詞）+7」は連語不定詞（Charles and Krahmalkov 2001:p.202）。前行のアジタワッダの町を建設したことが、結果的に「～であるように」のニュアンス。「7797」は、「7797≡Be動詞」の3・単・男。「97777」は、男性名詞で「防御地」。ちなみに、ヘブライ語「מגדל」は、女性名詞で「防御地」。「79& 770+7・for」は、「アダナの平野にとって」。次行頭と合わせ、「アダナの平原とモポスの家にとって防御地であるように」云々。

-7 770 79&7 77 77779Y 777 7 15
Adana Valley of area for were my days in as Mops

「7777 79・モポスの家」は前出。「4・and」と「7・for」が付く。

「7・my+7777・days +9・in +7・as」の構成。「-7・as」は、従属節を導く小辞。「777≡be動詞（前出）」。主語は、次行の「70777Y 09W・豊穡と美味なるもの」。合わせて、「私の日々には、アダナの平原に豊穡と美味なるものがあったので」。

-77797 777 77 79Y 70777Y 09W 79 16
Danunians to ever were not And dainty and plenty

以下、対比的に説明される。「79」は「否定・negation」の小辞。後に「777≡be動詞」がある。合わせて「～がなかった」。「～」は次行。「7777」は、副詞「ever」。「777797・ダヌヌ人達+7・for」。「77-」（複数形語尾）は次行の頭にきている。

MW I MAQA YKX SAU ZMAYZA LL W 17
 put this city the I built And my days in night

「LL」は「夜」。「Z+MAKZ+A・私の日々に」(前出)。前行と合わせ、「かつて、ダナナ人にとって私の日々(時代)には夜がなかった」。即ち、平和な時代であった。

「SA」は、「ZSA・建てる」の不・絶・過完。主語は「YKX・私」。目的語は、「MAQ・町+A・the」+「I・this」、即ち、「この町」。

「MW・置いた」は前出。「YKX・私」。「W・名前」。「ZAYMAIX・アジタワッディ」。次行と合わせ、「アジタワッディと名前を付けた」。

SA YKX SWZ ZAYMAIX W W YKX 18
 it in I resettled Azitawaddi name I

「SWZ・住ませた」(不・絶・過完)は、Yip'il (使役能動) 態。同語には、「座らせた」(第2欄の11行目)の意味もあるが、目的語が神(19行目の頭)なので、「鎮座させた」。主語は「YKX・私」。「W」は「W・it+A・in」の構成。合わせて、「私は(～神を)そこに鎮座させた」。

LYL BAI YLZY WZAMKAY LOA 19
 all to sacrifice brought and KRNTSYS Baal

「WZAMKAY LOA」は、「バアル KRNTSYS (読み未詳)」神。神の性格は不明。文脈から、アダナの平原とアジタワッダ市の守り神と見られる。

「YLZ」(不・絶・過完)は、「YLZ・歩き行く・運ぶ」のYip'il (使役能動) 態で、「持ち運ばせた」。ヘブライ語も「LH・運ぶ」(Brown・Driver・Briggs 1951:pp.229-237)。主語は、前行の「YKX・私」。目的語は「BAI・生け贄」。「LY・all+L・to」の構成は、「すべてに対し」。文言は、次欄に続く。

第Ⅲ欄

WA[B MA]AY JLX WYZ BAI MAYMA 1
 ploughong season of in and 1 ox days sacrifice of casts (statues) the

「MAYMA」は、「MAYMA・像」の複数形。動詞「YMA・鑄込む」派生の名詞か。「-A・the」が付く。前欄と合わせ、「私はすべての像へ犠牲を持ち運ばせた」。

ここで注記が必要。Krahmalkov (2000:p.298)は、「MAYMA」を「n.f. SEASONAL SACRIFICE, lit., LIBATION」(季節の神事)とみて、「MAYMA LYL」を「at all the seasonal sacrifices」と英訳している。なお、ヘブライ語は、動詞「LMD・混ぜる」、名詞「LMD・混合品」(Brown, Driver and Briggs:1951p.587)。Segert (1976:p.294)は「statue」説、Gibson1982:p.51は「image」説、谷川 (2001:p.)は「鑄物の像」説である。

「BAI」は「犠牲の」(合)。「WYZ・日々」は「WZ・日」の複数形。前置詞はないが、「犠牲の日ごとに」といった意味。「JLX・雄牛」(単)。即ち、犠牲の日ごとに雄牛1頭が奉納された。ここで3字(復元)が欠損。

行末2字は左石に飛び出ている。

「メ・季節の+△・in+ヤ・and」の構成。「メ・季節の」(女・合)。「WA」は「耕作」(合)。次行頭の「W・羊」と合わせ、「また耕作の季節に羊1頭」。1行目末の2文字「WA」は、隣の石碑に及んでいる。

- [ヤ] AY LOA YAY W AYP メAY W 2
KRN- Ba'al bless ! And 1 sheep harvest season of in and 1 sheep

「メ・季節+△・in+ヤ・and」は前出。「AYP」は「収穫の」(合)。「W・羊」は前出。「また収穫の季節に羊1頭」。即ち、耕作の季節にも羊1頭が奉納された。

「YAY」は、動詞「祝福する」。祈願・願望文の冒頭に登場し、英語の「May bless・・・!」(希求法)に該当する(Krahmalkov:p.175)。

「WZAYAY LOA」神は前出(第2欄19行目)。綴りは次行にわたる。

ウLW ウZB AYMIX メZK WZAM 3
peace and long life Azitawadda (accusa.) TRYS

「メZK」は、対格マーク。「AYMIX・アジタワッダを」。前行と合わせ、「バアルKRNTRYS神がアジタワッダを祝福したまうように!」。

「ウZB」は「ZB・生命」の複数形。文脈から「長寿」。「ウLW」は「平和」。

WZAYAY LOA メナL ウLW LY LO AYK IOY 4
KRNTRYS Ba'al him give May ! king all than greater power and

「IO・力」。「AYK」は、形容詞「強力な」。後の前置詞と合わせ、「より大きな力」。前置詞「LO」は多様な意味があるが、ここでは「than」。「ウLW・king LY・all」。即ち、「すべての王より大きな力」。合わせて、「長寿と平和とすべての王より大きな力を!」。

連語不定詞「メナL」は、説明が必要。「メ(人称代名詞)+ナ(女性語尾)+ナ(動詞)+L(命令・願望を示す接頭辞)」の構成。「メナ」は、「ウメZ・与える」。本来は、2語根の弱動詞「ウメ」で、弱子音の「メ」が付加されたもの(Segert1976:p.148)。ここでは、接頭辞「-L」に同化し、消えている。「ウ」も、女性形語尾「メ-」に同化し、消えている(同p.146)。人称代名詞の「メ-・him」(3・単・男)。彼に与え給うのは、「WZAYAY LOA・バアルKRNTRYS神」と、次行の「町のすべての神」である。なお、最後の単語「WZAYAY」は、左の石に飛び出している。

AYY ウウZ YAK AYMIXL メAP ウLK LYY 5
many and days long Azitawadda to city gods all and

「ウLK」は、「LK・神」の複。「メAP・町」(女)。前行末と合わせ、「そしてバアルKRNTRYS神と町のすべての神々が」。「AYMIX+L・to」は「アジタワッダに対し」。「YAK・長い」。「ウウZ」は、「ウZ」の複数形「日々」。「AY・many」。

-למ לך לו אדך יוך מפוך מאמך משך 6
 kings all than stronger power and good old age and years

「משך」は、「משך・年」の複数形。前行末と合わせ、「長い年」。「長い日々と多くの年々」。4行目後半と合わせ、「そして、バアルKRNTRY神と町のすべての神々が、アジタワッダに、長い日々と多くの年々を与え給うように！」。

「מאמך」は、女性名詞「老齢」。「מפוך」は、形容詞「פוך・良い」。女性名詞の後なので、女性形「מ」。 「良い老齢」。「אדך・力」以降は、4行目に前出。「すべての王より大きな力を！」。「למ・王」の末尾は、次行の頭。

פוך מאמך ואם מלוא י מאמך לך ו 7
 people and wine and splenty owner of this city the Be ! and

「לך≡Be + לך・and」。祈願文「そして、～であるように！」。8行目では、「לך」(未・命)で記される。主語は「מאמך・町+ו・the」。指示代名詞「י・this」がくる。

「מלוא」は、「領主・持ち主」など。ここでは「～の持ち主」(女・合)。以下、内容が羅列される。

「ואם・豊穰」(前出)。「מאמך」は「葡萄(新)酒」。合わせて、「この町が豊穰の持ち主で、かつ葡萄(新)酒の持ち主であるように！」。

行末は、「פוך・人々+לך・and」の構成。文言は、次行に続く。

-ואם מלוא לך לך ואם ו י 8
 owner of and oxen owner of Be ! it in dwelling who this

「י・this」は指示代名詞(独)。「ו」は「who」。「ואם」は、分詞「住んでいる」。「לך・it+ו・in」。合わせて、「そこに住んでいるこの人々」。祈願文の主語。「לך」は「לך」の3・単・男・指。未完了形と指示形は同綴り(Segert1976:pp.133-134)。文脈から「～であれ！」といった意味。「מלוא לך」は「雄牛(pl)の持ち主」。「לך לך」は「羊の持ち主」。「לך」の単・複は同綴り。

לך מאמך מאמך ואם לך לך ו 9
 Bear ! exceedingly and wine and plenty of owner of and sheep

「מאמך ואם לך」は「豊穰と葡萄(新)酒の持ち主」。

「מאמך+לך・and」の構成。「מאמך+ו」は、形容詞「מא・多くの」の複数形に、接頭辞「ו」がつき、副詞「大いに」になったもの。ヘブライ語の「מא・exceedingly」(Brown, Driver and Briggs1951:p.547)に相当する(Krahmalkov2001:p.259)。「לך」は、動詞「産む」の指示形(3・単・男)。「大いに産むように！」。

-מא מא מא מא 10
 Azi- for Serve ! exceedingly and Become powerful ! exceedingly and

「מא・大いに+לך・and」。「מא」は、「מא・強大になる」の3・単・男・指示形「強大になれ！」。

「**𐤀𐤁𐤐𐤔**」は、「**𐤀𐤁𐤐**・奉仕する」の3・単・男・指示形「奉仕せよ!」。次行にかけ、「**𐤀𐤃𐤎𐤓𐤓𐤔**+**𐤌**=アジタワッタのため」および「**𐤎𐤔𐤎𐤓𐤓𐤔**+**𐤌**・モボス家のため」。

𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤌𐤐𐤁 𐤀𐤁𐤐𐤔 𐤎𐤔𐤎 𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤀𐤃𐤎 𐤀𐤃𐤎 11
 gods and Ba'al because of Mops house of for and -tawadda

「**𐤀𐤁𐤐**+**𐤓**」(前出)は「~のために」。「**𐤌𐤐𐤁**」は「バアル」神。「**𐤎𐤓𐤓𐤔**」(複)は「神々」。合わせて、「バアルと神々のために」。

𐤏𐤔 𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓 𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓 𐤀𐤌𐤎𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤓 12
 if princes in a prince and kings in a king if And

「**𐤎𐤓𐤓**」は、予期の接続詞「if」。「**𐤎𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓**+**𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤓**」は、「諸王の中の一人の王」。「**𐤎𐤓𐤓𐤓𐤓**」は「**𐤓𐤓𐤓𐤓**・皇子・君主」の複数形。「**𐤎𐤓𐤓𐤓𐤓**+**𐤓 𐤓𐤓𐤓𐤓**」は、「諸皇子の中の皇子」。「**𐤎𐤓𐤓**・if」以下、更に次行に続く。

𐤏𐤃𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤎𐤓𐤓 𐤀𐤎𐤓𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓 13
 Azitawadda name of shall erase who name man of (is)who man

「**𐤎𐤓𐤓𐤔**・人」。「**𐤎𐤓𐤓**・who」。「**𐤎𐤓𐤓**・名前」。前出。「**𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤔**」は「名のある(高名な)人」。前行末と合わせ、「もし名のある(人であるところの)人が」といった表現。

更に、「**𐤎𐤓𐤓**・who」。「**𐤀𐤎𐤓𐤓𐤓**」は、「**𐤔𐤀𐤎𐤓𐤓**・削り取る」の3・単・男・未。未来のことを指す。「**𐤎𐤓𐤓**・名前」。「**𐤀𐤃𐤎𐤓𐤓𐤔**・アジタワッタ」。次行前半と合わせ、「もし(前記の人物達が)アジタワッタの名前をこの門から削りとったら」。人名末尾は次行頭。

𐤏𐤔𐤔𐤔 𐤀𐤎𐤓𐤓𐤓 𐤓𐤓𐤔 𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤓𐤓𐤓𐤔 𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓 𐤀 14
 (accusa.) shall covet moreover If name put and this gate from

「**𐤀𐤌𐤎𐤓**+**𐤓**」の構成。前置詞「**𐤏𐤓**」は、動詞「削り取る」の目的語で、「from」。「**𐤀𐤌𐤎𐤓**」は「(街の)門」。「**𐤓𐤓𐤔**」は、指示代名詞「this」。「**𐤎𐤓𐤓𐤔**・置く+**𐤏𐤓**・and」は、「そして(おまえの)名前を記したら」の意味。この部分は、結果節なので、通例、動詞に変化(主文の動詞は、未完了形)はない。

「**𐤎𐤓𐤓**」(前出)は「if」。「**𐤓𐤓𐤔**・更に」は接続詞。「**𐤀𐤎𐤓𐤓𐤓**」は、「**𐤀𐤎𐤓𐤓**・欲しがる」の3・単・男の未完了(未来)形。「**𐤎𐤓𐤓𐤔**」(前出)は対格マーク。末尾は次行頭。対格は、次行の「**𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓**+**𐤓**・the」、即ち「この市」。

𐤏𐤔𐤔𐤔 𐤌𐤐𐤓𐤔 𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤓𐤓𐤔 𐤀𐤌𐤎𐤓𐤓𐤔 𐤀𐤓𐤓𐤓𐤔 𐤓𐤓𐤓𐤓𐤓 𐤎𐤓𐤓𐤓𐤔 𐤎 15
 A- made which this gate the shall pull out and this city the

「**𐤀𐤓𐤓𐤓𐤓**」は、「**𐤀𐤓𐤓𐤓**・引く抜く」の3・単・男・未完了(未来)形。「**𐤓𐤓𐤔**・this **𐤀𐤌𐤎𐤓**+**𐤓**・the」は、「この門」。「**𐤌𐤐𐤓𐤔**・造った」は、3・単・完。主語は「**𐤀𐤃𐤎𐤓𐤓𐤔**」。合わせて、「そして、アジタワッタが造ったとこ

ろのこの門を引き抜き」云々となる。

𐤆𐤋𐤐 𐤓𐤕 𐤓𐤕𐤕 𐤀𐤀 𐤀𐤐𐤕𐤌 𐤋𐤐𐤕𐤕𐤕 𐤀𐤕𐤓𐤀 16
it on name put and another gate(accusa.) shall make and -ztwadda

「𐤋𐤐𐤕𐤕𐤕・造る + 𐤕・and」。𐤋𐤐𐤕𐤕𐤕」は、「𐤋𐤐𐤕・造る」の 3・単・男・未完了（未来）。𐤀𐤐𐤕」は「門」。𐤀𐤀」は「another」。

「𐤀𐤐𐤕+𐤌」に関しては、二つの可能性がある。アラム語の「-𐤌」（名尾1982:p.1458）のように、対格を示す接頭前置詞案か、通例の前置詞「for」案かである。

例えば、Krahmalkov (2000:p.248) は、この部分を「and make it (the city) another gate」と英訳。谷川 (2001:p.160) は、「対格の印」とみて、「別の門造り」と和訳 (p.28)。通例の対格印は「𐤓𐤕𐤕」(14行目末) である。

「𐤓𐤕 𐤓𐤕・名前を記す」は前出。次は「𐤕・it+𐤋𐤐・on」の構成。合わせて、「そして別の門を造り、またその上に名前を記しても」云々となる。

𐤐𐤕𐤕𐤕 𐤐𐤀𐤕𐤕 𐤓𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤓𐤕 𐤐𐤕𐤕𐤕 𐤓𐤀𐤕𐤕𐤕 𐤓𐤕 17
shall put out malice with and hatred with even if shall pull out love by even if

接続詞「𐤓𐤕」は、ここでは「even if」の意味。「𐤓𐤀𐤕𐤕𐤕・愛情(女)+𐤕・with」は、「愛情をもって」。「𐤐𐤕𐤕𐤕」(前出)は、「𐤐𐤕𐤕・引く抜く」の 3・単・男の未完了（未来）。「例え愛情をもって引き抜いても」。

「𐤓𐤕・even if」。「𐤓𐤕𐤕𐤕𐤕・憎しみ(女)+𐤕・with」は、「憎しみをもって」。「𐤐𐤀・悪意+𐤕・with+𐤕・and」の構成。「また悪意をもって」。下行頭と合わせ、「例え愛情をもってでも、憎しみと悪意をもってでも、この門を引き抜いたら」云々。

𐤕𐤀𐤕 𐤕𐤐 𐤋𐤕𐤕 𐤓𐤓𐤕𐤕 𐤋𐤐𐤕 𐤀𐤓𐤕 𐤀𐤕𐤓𐤀 18
land creator of, God and Heaven Owner of May efface ! and this gate the
(Baal Shamem)

「𐤀・this + 𐤀𐤐𐤕・門 + 𐤕・the」は前出。

「𐤀𐤓𐤕」は、動詞「𐤕𐤀𐤓𐤕・消す」の 3・単・複・未完。3人称（神々）に対する強い指示形で、「抹殺されますように！」。以下、依頼される神々が登場する。

「𐤓𐤓𐤕𐤕 𐤋𐤐𐤕・バアル シャメモム」神は、「天の持ち主」の意味。「𐤋𐤕・神」。「𐤕𐤐・創造者」は、「𐤕𐤕𐤕・手に入れる・創造する」の分詞形。「𐤕𐤀𐤕・大地」。合わせて、「神：大地の創造主」。

𐤓𐤕𐤕𐤕𐤕𐤕 𐤓𐤕𐤕 𐤓𐤕𐤕 𐤕𐤕 𐤀𐤀 𐤋𐤕𐤕 𐤓𐤋𐤐 𐤓𐤓𐤕𐤕 19
kingdom of the (accusa.) gods of son family all and Eternity Shames and

𐤓𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕 𐤓𐤕𐤕𐤕 𐤓𐤕𐤕𐤕 𐤕𐤕
(accusa.)and that man king of the (accusa.)and that man

19行目は、石碑を飛び出し、台石上に記されている。「𐤆𐤋𐤐 𐤆𐤆𐤆」は、神名「永遠なるシャムシュ」。「𐤆𐤋𐤐」は、名詞「永遠」。「𐤋𐤆・all」。「𐤑𐤑」(合)は「～の家族・氏族・一族」。「𐤑𐤑」は、「～の息子」(合)。「𐤆𐤋𐤆」は「𐤋𐤆・神」の複数形。合わせて、「神々の息子の一族のすべて」。即ち、「バアルシャMEMと、神：大地の創造主と永遠なるシャムシュと、神々の息子の一族のすべて」。

抹消されるのは次の者。「𐤆𐤋𐤆」は対格マーク。「𐤆𐤆𐤋𐤆𐤆𐤆・王国(女) + 𐤑𐤑・the」。

「𐤆𐤑𐤑」は、前方照応代名詞「その人」(3・単・男)で、既に述べられた「門を引き抜く人」を指す。再び、対格マーク「𐤆𐤋𐤆」。前方照応代名詞が付く、「𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤋𐤆」は、「その王(門を引き抜く王)」。「𐤆𐤋𐤆(対格記号) + 𐤑𐤑・and」。

第IV欄

𐤆𐤆𐤋𐤆 𐤆𐤆 𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤑𐤑 𐤑𐤑 𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤑𐤑 1
Only name man of who that man

「𐤆𐤆𐤋𐤆・name + 𐤆𐤑𐤑・man of + 𐤆𐤑𐤑・who + 𐤆𐤑𐤑・that + 𐤆𐤑𐤑・man」は前出(第III欄)。前方照応代名詞「𐤆𐤑𐤑・その人」が入って、「高名なその(門を引き抜く)人」といった意味。合わせて、「(門を引き抜く)その王国と、(門を引き抜く)その王と、(門を引き抜く)高名なその人を」。

以上、長々と記された上で、結語が明示される。「𐤆𐤆𐤋𐤆」は、対比的な意味の副詞「only」。ヘブライ語の「𐤐𐤑𐤆𐤑𐤆・only」に相当する。

𐤆𐤆 𐤆𐤆𐤋𐤆 𐤆𐤋𐤐𐤋 𐤑𐤆𐤑𐤑 𐤑𐤆𐤑𐤑𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤆 2
name of like eternity in Be! Azitawadda name

「𐤑𐤆𐤑𐤑𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤆・アジタワッダの名前」。「𐤑𐤆𐤑𐤑」(≒Be動詞)の3・単・男・指示形。即ち、「存在するように!」。「𐤆𐤋𐤐𐤋・eternity + in (前)」は、「永遠に」。「𐤆𐤆𐤋𐤆」は、前置詞「like・～のように」。

𐤑𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤆𐤆 3
Yerah and Shames

「𐤑𐤆𐤑𐤑 𐤆𐤆𐤆」は、神名「シャメシュ(太陽の神)とヤレフ(月の神)」。「前行と合わせて、「アジタワッダの名前だけ存在し続けよ! シャメシュ(神)とヤレフ(神)の名前のように!」となる。アジタワッダのその後の運命はいかに。この地に存在・繁栄した都市が、やがて廃墟となったことだけは確かである。

謝辞

近況で、嬉しいことが一つある。高名なセム語研究者・Javier TEIXIDOR (Professeur honoraire au Collège de France) ご夫妻が、来日の際、旧知の小玉新次郎先生 (日本におけるバルミラ研究の第一人者) と共に、わざわざ奈良まで逢いに来て下さった。後日、心暖まる激励の手紙や論文も拝受した。全くの初心者にとって、夢のような出来事である。学恩に答えるべく、牛歩ながら研鑽を積み重ねていく所存である。御礼。

Bibliography

- Benz, F.L., 1972, *Personal Names in the Phoenician and Punic Inscriptions*, Biblical Institute Press.
- Black, J., George, A., and Postgate, N., 2000, *A Concise Dictionary of Akkadian*, Harrassowitz Verlag.
- Brown, F., Driver, S.R. and Briggs, C.A., 1951, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Oxford.
- Gibson, J.C.L., 1982, *Textbook of Syrian Semitic Inscriptions, III, Phoenician Inscriptions*, Oxford.
- Coulmas, F., 1996, *Encyclopedia of Writing Systems*, Blackwell.
- Harris, Z.S., 1936, *A Grammar of the Phoenician Language*, American Oriental Society, New Haven.
- Hawkins, J.D., 1998, *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions: a Project, Ancient Anatolia*, R. Matthews ed., The British Institute of Archaeology at Ankara.
- Hoftijzer, J. and Jongeling, K., 1995, *Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions (Part one and two)*, E.J. Brill.
- Krahmalkov, C.R., 2000, *Phoenician-Punic Dictionary*, Peeters.
- Krahmalkov, C.R., 2001, *A Phoenician-Punic Grammar*, Brill.
- Kuhrt, A., 1995, *The Ancient Near East : c.3000-330 BC*, Routledge.
- Lipinski, E.D., 2001, *Semitic Languages: Outline of a Comparative Grammar*, Peeters.
- Naveh, J., 1987, *Early History of the Alphabet*, The Magnes Press.
- Peckman, S.J., J.B., 1968, *The Development of the Late Phoenician Scripts*, Harvard University Press.
- Pop, M., 1999, *The Story of Decipherment, Revised Edition*, Thames and Hudson.
- Robinson, A., 1995, *The Story of Writing*, Thames and Hudson.
- Segert, S., 1976, *A Grammar of Phoenician and Punic*, Verlag C.H. Beck Munchen.
- Szymer, M., 1981, *La Date des Inscriptions Phéniciennes de Karatepe : Problèmes Philologiques et Paléographiques, Revue d'Assyriologie et d'Archéologie Orientale 75*, Presses Universitaires de France.
- キリスト教聖書塾1990年『ヘブライ語入門』キリスト教聖書塾
- 田中晴美編1988年『現代言語学辞典』成美堂
- 谷川政美 2001年『古代の歴史ロマン③ フェニキア文字の碑文』国際語学社
- C.W.ツェーラム1959年『狭い谷、黒い山』(辻理訳) みすず書房
- 古川清風 1989年『ギリシャ語辞典』大学書林
- D.J.ワイズマン1995年『旧約聖書時代の諸民族』池田裕訳 日本基督教団出版局